

和田ながら×シャンカル・ヴェンカテシュワラン(インド)  
『「さようなら、ご成功を祈ります」(中略)  
演説『カーストの絶滅』への応答』第2回報告書  
(制作過程とリハーサル視察)  
柴田隆子

インタビュー：シャンカル・ヴェンカテシュワラン×和田ながら  
(2022年11月23日)

——このプロジェクトが始まったきっかけは。

**シャンカル** 『犯罪部族法』制作時にアンベードカルのテキストと出会い、アーティストとして挑みたいと思うと同時に、実現不可能とも思いました。そんな時、山田せつ子さんの橋渡しで京都芸術大学舞台芸術研究センターとのコラボレーションの機会を得、異文化の環境でならば上演できると考えました。

**和田** 私も山田せつ子さんから、シャンカルさんと一緒にやってみないかと電話をもらったのがきっかけです。『カーストの絶滅』が題材と聞き、私はインドのカースト制度や日本の差別構造に詳しいわけでもなく不安はありました。ただ妊娠を経験したことのない俳優が妊娠・出産を演じる作品『擬婉』を手掛け、当事者でない者が演じる演劇の可能性を感じていて、またシャンカルさんが演出された『水の駅』も面白く思っていたので一緒にやってみたく思いました。

**シャンカル** ながらさんとのコラボレーションで、テキストの意味やパースペクティブが広がりました。インドの人間には持ち得ないような、外からの観点は自分にとって驚きでした。

——インドでの滞在はいかがでしたか。

**和田** 皆さんと生身で会えるのが嬉しかったです。滞在期間は短かったですが、シャンカルさんが建てた劇場は素敵でした。山奥でインディペンデントな劇場を維持し、ローカルなコミュニティとコミュニケーションしながら作品を作っている凄さを感じました。京都のTHEATRE E9 KYOTOを見ていて、ある特定の地域と関係を持ちながら劇場を建てるのは非常にタフなことだとわかっていたので。ほとんどはそのアタパディの劇場で過ごしましたが、1日だけ都市部であるトリシュールの街に行きました。車やバイクを運転しているのは男性ばかりで、一定の年齢以上の女性の服装はトラディショナルで、ビールが飲めるバーには我々以外に女性はいないなどに気づけ、このクリエイションにつながる重要な経験となりました。

——社会の中で「女性」に関心を持っておられるのでしょうか。

**和田** クリエイション初期には中心になかったのですが、「女性」の比重がだんだん自分の中で膨らんでいる気はします。とはいえ、私は別にインドの女性ではなく、日本でこれまで幸運な人生を歩んでこられた女性です。自分が「女性」として特権的な位置にいることがディスカッションの中でわかってきたので、その意味をクリエイションの中でよく考えていますね。

——ケーララの劇場でのリハーサルはどうだったのでしょうか。

**シャンカル** リハーサルはながらさん主導で、全員が3つの言語で演説を朗読しました。1日に1人が全体を朗読し、ディスカッションでその反応を皆で共有しました。毎日集中して3、4時間通してアンベードカルのスピーチを読み上げることで、テキストの異なるトーンや3人のそれぞれの観点が見えてきました。

——異なるトーンというのは、言語的なものでしょうか、それとも俳優の身体的なものでしょうか。

**シャンカル** 両方です。私たちはオンラインリハーサルでテキストを読んできましたが、通して読むというのは歴史的な瞬間でした。なぜなら、このテキストは今まで声に出されたことがなかったからです。3言語で声となったことは感慨深く、それ自体がすでに3つのパフォーマンスでした。

**和田** 初日にルディ(アニルドゥ・ナーヤル)さんに英語で、2日目に武田(暁)さんに日本語で、3日目にチャンドル(チャンドラ・ニーナサム)さんにカナダ語でやっていただきました。



京都でのリハーサル風景

——通して3、4時間というのは見る側も集中力を必要とすると思いますが、それだけ強度のあるパフォーマンスだったのでしょうか。

**シャンカル** オープンリハーサルとして、観客にも公開したいようなものでした。おそらくインドでやったことが大きかったのだと思います。多分、日本では同じようにはならなかったでしょう。

——今の時点でどのような舞台を考えていますか。

**和田** 現代の日本に生きているリアリティを参照せずにはいられないようなパフォーマンスにしたいです。観客が自分の人生の中でこのテキストを考える仕組みとして、アフタートークのような上演を考えています。

**シャンカル** アフタートークをパフォーマンスにするのはとても自然で、実践的な方法です。語られなかったテキストを想像することは、創造的な思考と熟考をもたらします。社会の中での自分の立ち位置への、ごくごく小さな疑問を観客の心に植えられるのではないかと考えています。アンペードカルはカーストというインド特有の問題を取り上げていますが、どの社会システムにおいてもヒエラルキーの問題はあります。その問題の根っこにある怒りや排除、権力構造といったものが重要です。

——観客や劇場空間についてはどのように考えていますか。

**和田** 観客との親密な距離が重要だと考え、張り出し舞台を作ります。舞台上の遠さと近さ、花道の空間的な関係を、作品と観客との時間における距離にうまく活かせたらと思います。

**シャンカル** このテキストが書かれたのは1936年です。一方、パフォーマンスが起こるのは「今、ここ」です。日本の演劇である能では何かが訪れますが、この上演では過去のものとしてあるテキストが「今、ここ」に現れます。およそ100年前にインドで書かれたテキストが、長い旅路を経て京都の劇場に現れるのです。

